

Vol. 173 君津商工会議所創立の恩人

故 白石光雄へ贈る言葉（弔辞文より）（平成21年12月10日）

白石さん 私はあなたと出会って凡そ三十年が過ぎました。今日はあなたの息子さん、博文さんから父を一番よくわかってくれている私にぜひお別れの辞をかけて上げて下さいとたっのお申し出を頂きました。今日はそっと片隅で送らせて頂きたいと思って居りましたが大変辛い、哀しい役目をお引き受け致すことになりました。

思えば十一月三日は立冬を目前に控えた、いつにない寒い夜でした。酒でにぎわった友人達が帰って、独りつく念として、病床に独りでいるあなたの事を想って居りました。電話が鳴って光雄さん！あなたが亡くなった知らせを受けました。

樋口一葉のたけくらべの一節に「朝の露、風の前の灯火 それよりもなお はかなきは人の命」と嘆いて居ます。まさに、人の思い、むなしく無常に吹く風は、時を選ばずでありました。

白石さんの初代後援会長だった私の父は、あなたのことを極めて先見性があり、正義感、信念の強いすばらしい人物だと高く評価されて居りました。

私が知る晩年のあなたは温厚篤実、人情味を持った誠心誠意、公平無私な市長さんであり、人の面倒みの良い方でありました。その思いやり暖かさに昨日のお通夜、今日のこの葬儀に次から次へ、後から後へとあなたを慕って来て下さる方々が続いております。生前のあなたのお人柄、人徳を忍ばせるにふさわしいご葬儀をさせていただいております。あなたがどう生きてこられたかの、まさに証明であります

あなたが再び病床につかれてからは週一回くらいにあなたを見舞うようになりました。お互いに奥さんを亡くし、私は妻を失って居りましたので老人が独りで生きるさみしさ、悲しさをよく分かって居りました。

私は病室に滞在する時間を二時間と決めて居りました。男同士ですと話すことも無くなって困るからでありました。

私が帰ろうとすると、あなたはいつも「もう帰るのかい？まだ早いよ！この室はいつまでいてもいいんだ…」と私が帰るのを嫌がってくれました。

強気で懸命に生きて来た一人の男が妻を失い、病に伏す時のつらさ、悲しさを今改めて思う時、もっとずっと傍についてあげればよかったと後悔しきりであります。

そんなあなたとの話の中で、あなたが一番喜んで下さった事は「光雄さん、あなたは政治家とし、市長さんとして信念を貫き、筋を曲げなかった立派な政治家だと思っておりますが、もっとすばらしかったことは、光雄さんが育てられた三人の子供達です。私はいつも感心し感服いたしております」と言うときあなたはとりわけ目を輝かせ、口元をほころばせて「秋元さん、あなたは本当にそう思ってくれているかい？そうかい！そうかい！白石光雄にとってこの上ない嬉しいことです。ありがとう！ありがとうございます。」とあなたは喜んでくれました。

奥さん亡き後は内外の孫達もすくすくと大きく成長してくれました。

後は病癒えて、曾孫を抱く日を楽しみにしていたことだろうと思う時、まさに無念やる方の無い想いであります。

あなたは今年で傘寿の祝い。

あなたの好きだった北国の春を肩を組んで唄える日を秘かに私は待っていました。

昨夜は妻の仏前で酒を飲み、音痴な私が独り大声を上げ唄い泣きました。

光雄さん、あなたは子孫に美田を残さずでしたが、すばらしい子や孫を育て、今日の君津市を築かれた名市長とし、名を残された事に冥して下さい。

私は今、会議所の会頭をさせていただいております。その多くの会員、家族から多年の宿願であった会議所の創立が出来、今日の繁栄を迎えられたのは白石市長の多大な理解と支援を頂いたからであります…と。

くれぐれも伝えて下さる様言い付かって参りました。

改めてありがとうございました。

あなたから教えられた数々の教訓、志は、私達が継ぎ、あなたとこの難しい時代を共に生きて来た事を誇りに思い、地域社会繁栄のために一層の精進努力をいたして参ります。

後から後から、次から次へと尽きぬ思い、申し上げなければと思う事もたくさんありますが、この辺でお別れをさせていただきます。

別れ行く悲しみ、二度と会えぬ辛さ、万感迫る思いであります。

西方浄土では先に逝かれた奥様、息子さん達、私の父も母もそして妻も迎えてくれると思います。私にとって、奥様達とお会いできることはうらやましくあります。

どうかこれからは、天にあってはご家族を護ってあげて下さい。あなたの名誉は家門の誉として私達が守り、受けたご恩は私達がお報い致して参ります。どうか心おきなく西方浄土へと旅立って下さい。

長い間本当にご苦労様でした。

お世話になりました。どうか安らかに、ゆっくりとお眠り下さい。

それでは さようなら さようなら さようなら 平成21年11月 立冬の日

終生の友 秋元 秀夫